



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

№ 4 平成 5 年 3 月 31 日
発行 日本山岳会熊本支部
熊本市二本木 3 丁目 3 - 8
(田上敏行・気付)
電話(096)324-1200
編集 本田誠也・河上洋子
印刷 上田印刷
熊本市南熊本 5 丁目 11-10

目 次

・支部長随想	1	・会員随想	13
・1992年度のカナディアン・ロッキー	2	・会務報告	23
・チョーオユー/シシャパンマ登山報告	8	・会員消息	25
・思い出の冠帽連山	11	・支部役員	26

熊本支部設立 35 周年を迎えて

支部長 本 田 誠 也

熊本支部は昨年設立35周年を迎えました。その記念すべき節目の年に私は第5代目の支部長に選任されました。前任の奥野さんは戦前の朝鮮の金剛山や冠帽連山のパイオニアであり、日本山岳会の永年会員でもあります。

このような大先輩の後を継ぐものとして荷の重さを感じずにはられません。会員の皆さんの一層のご助言、ご協力をお願いする次第です。昨年夏には、この支部設立35周年を記念してカナディアン・ロッキーに登山隊を派遣し、私も参加しました。「誰でも行ける海外登山」としてトレッキングと併行して実施したので、会員の高齢化を反映して40代から70代後半という中高年パーティとなりました。主目標のアサバスカ峰3,492mの登頂は、私など高年組の体力とトレーニング不足のため、山頂近くまで迫りながら断念しました。隊員の余力、時間、氷河ルート状況などから工藤隊長の「勇気ある決断」により、無事下山することができました。些か気合いに欠けるところはありましたが、無理をしない、

安全登山の鉄則を守ることはできたと思います。とは言え、存分にカナダの雄大な大自然の美を満喫して、楽しい山旅となりました。また、カトマンズクラブが実施するヒマラヤ登山隊に馬場博行会員を派遣しました。チベットから二つの8,000m峰チョーオユー8,201mとシシャパンマ8,013mの連続登頂を目指すという意欲的な計画で、更に山頂からパラグライダーで滑降を試みるという馬場会員の私的計画も付加されたものでした。チベット入りの前に^{みずがけ}鏝 正博会員と共に、アンナブルナ山域トロンパス周辺で入念な高度順化の後、チョーオユーに向かいました。9月20日、44才の馬場会員は無酸素登山の苦痛に耐えてチョーオユーの登頂に成功しました。強風のためパラグライダー滑降は断念しました。続くシシャパンマは絶えることのない強風のため、頂上直下7,780mまで迫りながら登頂を断念しました。その健斗を讃えると共に、ご支援ご激励をいただいた会員の皆さまに厚くお礼申し上げます。

1992年夏のカナディアン・ロッキー

—— 日本山岳会熊本支部設立35周年記念登山隊の記録 ——

工 藤 文 昭

「近いうち、いっちゃん海外の山ばやりまっしょか。」こんな話が出たのは平成2年の新年晩餐会帰りの二次会の席上であった。

居合わせた5、6名の会員も酒の勢いもあってか「行こう、行こう」と盛上がった。実は支部設立30周年の記念行事として、カナダ遠征を計画しながら諸般の事情で立ち消えになった経緯があった。今度は何としても実現させたいという願いが誰の胸にもあったのだろう。4月、支部総会の役員改選では遠征実現のシフトが敷かれ、35周年記念行事として海外登山を行う方向で体制がつくられた。

工藤と広吉が担当委員として、計画と準備に当たることになった。目標とする山の選定に当っては、比較的日本から近く、入山のアプローチが短く、レンタカーのデポ地からすぐ山に取付けられる便利さや、広大な氷河登高の醍醐味が味わえることなどからカナディアンロッキーをおいてないと、すんなり決まった。

また、アサバスカ峰3,492mに登ることにしたのは、氷河に囲まれた山でありながら比較的登りやすく、しかも風格をそなえた山であるとして決定した。平成3年の春から遠征の日程の検討に取りかかり、海外旅行の交通、宿泊などアルパイン・ツアー社との折衝すべては旅行業務取扱主任者の資格をもつ広吉委員が、一手に引受けて問題の処理に当たってくれた。この年の8月の夏季例会には具体的な計画を提示して参加者を募る予定であった。

しかし準備が遅れて、実際に参加者の募集を始めたのは平成4年の1月からであった。

但し、前年夏に必要なところについては、15名分の予約を押さえておいた。4月末日の申込み締切りで11名の参加が確定し、負担金

50万円の払込みも済んだ。5月11日の支部委員会の時、同時に第1回準備会を開催し、以後出発まで都合4回の準備会を開いて計画の万全を期した。7月5日に装備、食糧、登山日程などの最終チェックを終り、各自荷物につけるタグを受取って、いよいよ出発という実感が湧いてきた。この段階になって残念なことは、池崎隊員が腰痛で入院し参加できなくなったことである。冒頭の呼びかけをされたのが実は池崎さんだっただけに本当に残念だったと思う。

(登山隊編成)

隊長 工藤文昭 副隊長 広吉 功
隊員 本田誠也 石井久夫 藤本多加志
藤本孝一 丸尾龍一

トレッキング 和仁古昇 河上洋子
大木野徳敏 計10名

(登山報告)

7月18日(土)晴 梅雨もまだ完全にあけやらぬこの頃の天候は不安定でむし暑い日和。9時半熊本駅に集合する。10時、田上事務局長より差入れと見送りを受けて真新しい特急つばめの車輛に乗りこみ出発する。博多駅から大きな荷物のためタクシー3台に分乗して福岡国際空港に向う。アルパインツアーの渡辺氏の出迎えを受け旅程について説明がある。搭乗手続を済ませ身軽になったところで昼食をとる。14時25分大韓航空でソウルに向け出国する。本当はダイレクトにカナダに飛びたかったのだが、運賃の安上りを考えるとこのルートにならざるを得なかった。しかし大韓航空のパイロットの腕はたしかで、快適な空の旅を楽しむことができた。

機上から見る韓国は、都市には高層ビルが

林立し、山河豊かにこの国の成長発展を実感できるものだった。ソウルでロスアンゼルス行きに乗りかえる。途中、日付変更線を跨いだためハワイ経由、同日の夕刻にはロスアンゼルスに着いた。現在アメリカ入国は短期間の滞在にはビザはいらないが、イミグレーションに提出するブルーカードを間違えて白カードをもらっていたためひと悶着する。その書替えや検疫に引っかかったりする者もいて、入国手続きに思わぬ時間がかかってしまった。

送迎バスをつかまえて、エアポートヒルトンホテルに向う。出発前のキャンセルなどで予約ミスがあったが、無事解決してチェックインを済ませたのが午後11時過ぎ、すぐにホテル内の食堂にかけこみ遅いディナーをとる。明日は早朝4時半出発なので早々に切り上げ夫々部屋に帰る。

7月19日(日) 晴 4時に起きてロビーに下る。寝不足と時差ボケが重なり倦怠感を覚える。4時半リムジンで空港に行き、デルタ航空のカウンターで搭乗・出国手続きを済ませる。出発までの待時間、スナックで朝食をとる。隊員達のオーダーがなかなか通じず、長蛇の列ができるが誰一人文句を言うものはない。

7時半、ロスを離陸し経由地のソルトレーク・シティに向う。ロス郊外からすぐ砂漠地帯になり、それは果てしなく続きつくづくアメリカの広さを感じた。ソルトレークも大きな湖で対岸は霞んで見えない程の広さである。10時ソルトレーク・シティに着く。時差が1時間あり、実際には1時間半の飛行である。広大な国土を持つカナダは標準時間が7つもあり、時差の観念がない日本人は時計の補正を忘れると大変なことになりかねない。ソルトレーク・シティから2時間半でカナダのカルガリーに着く。この町はカナダ大平原の西の入口に位置し、西にロッキーの雄姿を望み、

東に広大なプレーリーを抱え、カナダの大自然のダイナミズムを両腕に抱える都市である。機上から眺めると大平原の中に忽然と現れ、あたかも蜃気楼に浮ぶ都市を思わせる。ニックネームは「牛の町」でアルバータ牛のステーキはこの町の名物料理になっている。入国手続き、両替えなどを済ませ、予約していたレンタカー3台に分乗して慌ただしくロッキーに向けて出発した。

空港から10分も走るとカルガリーの住宅街、美しい並木通り、両側にはお伽の国から運んで来たような可愛らしい家並が続く、よく手入れされた芝生と色鮮やかな花々が咲き競っている。町を出はざれると大平原の中をトランスハイウェイが真直ぐにのびる。途中でルピナスが咲き乱れる草原に降り立った。さんさんと輝く陽光、澄み切った空気、湿度が低くカラッとして気持ちよい。いま現実にカナダにいる思いがこみあげてきて身震いするほどに感激する。時差ぼけが脱けず、車を運転しているとやたらと眠い。しかし山間を縫いながらのびるハイウェイは幅広く、行きかう車も少なく走りやすい。約2時間でバンフに着く。

山の町 バンフ

バンフはいかにも山の町といった感がする。広い通りの中央には花一杯の花壇があり、正面には三角形のカスケード山が雪を纏い聳えている。通りの両側には観光地らしく土産物屋が並んでいるが、俗悪なものは全然目につかない。ここで手分けして1週間分の食糧、燃料などを購入する。酒類もカナダではどこでもは買えず、レストランでも酒を出さぬ店が多いので若干買入れる。午後9時過ぎ今日の宿泊地レイクルイーズに着いたがまだ明るく、黄昏は10時過ぎまで続いた。

ビクトリア山とテンプル山が夕日に赤く染まり美しい。宿舎のレイクルイーズ・インは自炊棟に分宿したが、これがなかなか立派な

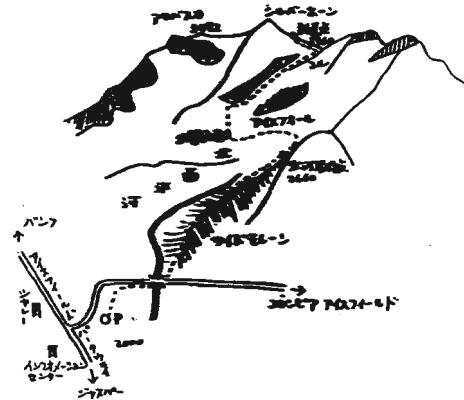
もので、10畳位のDKに8畳位のベッドルームがついている。勿論炊事用具は完備しており利用者は料理の材料だけ持って行けばよい。別に広い庭付きの一戸建てもあり、しかも安いときているから言うことはないのだが、我々はゆっくり過ごせる時間もなくて残念だった。

7月20日(月)快晴 今日明日の登山に備えて足馴らしのため、近くの湖沼めぐりをする。

先ず訪ねたルイズ湖は暗緑色の水をたたえ、背後に氷雪のビクトリア山が朝日に輝き周囲をメタセコイアの豊かな森林に囲まれてさすがにロッキーの宝石と呼ばれるにふさわしい神秘的な眺めである。更にそこから10分も車で山を登るとモレーン湖。褐色の岩壁が城砦のように屹立したテン・ピークスがミルキーブルーの湖面に投影して美しい。ルイズ湖の女性的優美な景観に対して、こちらは豪放で男性的な感じがする。後ろ髪をひかれる思いにかられながら、アイスフィールド・パークウェイに戻る。トランスカナダハイウェイと別れ、コロンビア・アイスフィールドに移動する。好天に恵まれ明日登る予定のアサバスカ峰は、氷壁と氷河をダイヤモンドのように輝かせている。登山口の標高は約2,000m、北面氷河の取付点2,600mあたりまで今日のうちに偵察しておこうと工藤、石井、藤木の3人で出掛ける。12年前、私が単独で登頂した時にくらべると、氷河が可成り後退しているように感じた。隣りのアサバスカ氷河では毎年7~8mも後退していると聞いたが、地球温暖化が進んでいるのだろうか。サイド・モレーンの尾根を約2時間かけて氷河左岸の取付点についた。ここまで来るとシルバーホーンの北壁も指呼の間で、雪崩の出そうな箇所もよく眺めることができた。登頂するには早朝からのスピーディな行動が要求されるだろう。今夜はアイスフィールド唯一の

シャレーに泊まる。夕食は量の多い中華料理で満腹した。夜は満天の星明かりにアサバスカ峰がかすかに浮かんで見えた。明日の好天は約束されたようであった。

(アサバスカ峰ルート)



7月21日(火)快晴 アサバスカ峰アタックそして敗退。3時半起床、4時半出発。天に輝く北の十字星に今日一日の無事を祈りながら7名で出発する。アイスフィールドの車道を1kmほど登り、北面氷河から流れ出る谷川の橋を渡り、左岸のサイドモレーンの尾根に取付く。ガレ場の尾根を1時間も登ると空が白みはじめる。昨日確認した氷河取付点で朝食をとる。このあたりで足の故障が完治していない広吉副隊長が腰を離れる。ここで6名の隊員を2パーティに分けアンザイレンをする。氷河の上は朝の陽が反射して雪眼鏡をかけていてもまばゆい位だ。歩き始めて暫くはクラストした雪面にきしむアイゼンの音が心地よかったが、陽が高く昇るにつれ雪が腐り歩きづらくなる。北面氷河の下部プラトー中央附近まで90分もかかった。

ヒドンクレパスに注意しながら歩くが、全体のピッチはいま一つあがらない。シルバーホーン北稜ルートから分岐すると、程なく北壁下部の登りとなる。頭上には懸垂氷河が覆

いかぶさり、いつ崩壊してブロック雪崩を起こしてもおかしくない状況である。スローなピッチは変わらず、傾斜が40度近くなると10mも歩くと息切れがして立止まり、呼吸を整えなければならない。この当たり高度は未だ3,000m足らずで高山病が出る筈はないのだが、症状は高山病に似ている。中高年の隊で出発までのトレーニング不足や、時差ボケがまだ抜けきっていないのだろうか。尺取虫のように少しづつ高度を上げるが、既に雪は腐って腰まで潜る所もあり消耗する。この斜面200mを登るのに90分を要した。一人の隊員が足にケイレンを起こしたが、北壁直下のもっとも危険な場所である。一刻も早くここを通過しなければと心が焦る。ここからのトラバース・ルートは60度位の急斜面が200mも続き、50m下にはクレバスが大きな口を開けている。慎重にスタカットでトラバースを終えると広い上部プラトーに出た。

シルバーホーン3,447mの頂上も間近に見えるが、それはミスレンジで実際にはまだ可成りの距離を残している。しかし危険な箇所はすべてクリアして後は技術的にも何の問題もない所まで登ったのに、上部プラトーを抜けてアンドロメダ北西稜に取付いた地点で我が隊の限界と判断せざるを得なかった。到達点約3,360m、山頂まで後僅か130mを残すだけだった。しかし登山を開始して9時間を過ぎており、これ以上進んで下山の余力を無くしビバークにでもなれば惨めでもあり、下で待つ隊員の心配も大きい。今回はこれで断念しよう。14時下山開始、氷壁のトラバースは危険な状態が続いており気を揉む。案の上、今朝登ったルートに幾つもの雪崩が走っている。北壁下部の急斜面は40mいっばいにザイルを伸ばしスタカットで下がる。幸運にも雪崩の直撃に見舞われることもなく氷河取付点に下り着いたのが17時40分であった。しばし休息をとりモレーン尾根を下り始めると、急

に閃光が走り雷鳴が轟き出し雨が降り始める。ピッケルやアイゼンなど沢山の金物を持って心配する程の雷鳴だったが長続きはせずホッとす。ふり返るとアサバスカの頂稜だけ夕陽に赤く染まり、優しく微笑みかけてくるようだ。7人が残り僅かな青春?の血をぶっつけた長くて短い一日。アサバスカよ、君とも触れ合うことができたとエールを送る。登山口まで下るとさすがに皆心配して待っていた。あまりに下山が遅いので遭難届けを出そうかとまで考えたらしい。海外の山では無線機の使用が面倒なため、今回は持参しなかったのがいけなかった。連絡が取れず余分な心配をかけてしまった。シャレーの連泊がとれないため下山後直ちに100km余のジャスパーへ移動。

22時頃、シャトー・ジャスパーに着いてホロ苦くも美味しいビールにありつけた。

その後7月22日から26日に帰国するまで、氷河湖のクルージングを楽しんだり、エディス・キャベルのアルパインメドウやロブソン山麓のシーダ・フォレストのトレイルを散策したり、またロブソンランチのログ・ハウスでは1kg200円のアルバータ牛ステーキを飽食したり、とにかく我々としては贅沢三昧をして、ロッキーの夏を堪能したのである。

現地での交渉一切を自らの手で行ったため費用も格安で済んだが、これは広吉マネージャーの力に負うところが多く感謝したい。

最後に、今回のカナダ遠征は熊本支部設立35周年記念行事の一環として出かけたが、往年山で鳴らしたクライマー達、40代から70代後半という強者ぞろいとあって、隊長を努めた私の責任も両肩に重くのしかかった。私にとって12年ぶりに訪れたカナディアン・ロッキーであったが、神が創造したままの姿で迎えてくれた。日本ならこの年数では原形をとどめぬ位、観光開発で変容していただろう。何一つ変わらず手つかずの自然の美しさが維持されていた。このことが何より嬉しかった。

目標としたアサバスカ峰の登頂こそできなかったが、国内の山を歩くように気軽にカナダまで出掛けることができたことの意義は大きかったと思う。その意志さえあれば地方からでもやれることの証明であった。この実績を今後に生かしてもらいたい。登頂できなかった原因の半分は、隊長の計画とリードのまずさにあったことを認めたい。残り半分は、夫々の体力不足でなかったか。山行中に出会った外国人登山家のパワフルな行動に対して、我々のそれは余りに見劣りがした。やはり海外の山を登るには中高年といえどもそれなりの体力を持ち、スピーディに行動できる力をつけておくべきであろう。多忙な仕事に追いまくられトレーニングどころではなかった人もいるだろう。ともあれ、この寄せ集め隊の力量からすると、全員が頂上に肉薄するまで頑張ったことは評価したい。今回の遠征実現のため尽力された田上事務局長をはじめ、多くの会員の皆さんに心から御礼を申し上げます。

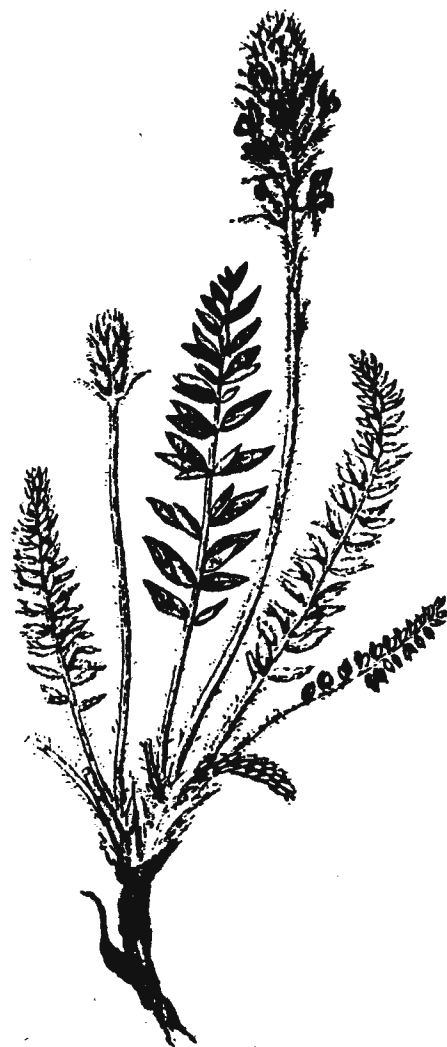
カナダ登山が終わって7ヶ月になろうとするが、今もカナダの自然が心を疼かせる。仕事を投げ出して今すぐでも出掛けたい。恋人に逢いに行く気持で……（工藤）

（会 計 報 告）

国内交通費（JR、タクシー）	41,920（円）
外国旅費	3,525,700
レンタカー予約	95,700
食糧、装備、医薬品	9,542
通信費、資料代その他	48,780
	3,721,642 円
食糧費	199,08ca ^F _ル
食事、チップ	340us ^F _ル + 2,717,00ca ^F _ル
国立公園使用料	60,00Cca ^F _ル
レンタカー超過分	421,20ca ^F _ル
燃料費	320,00ca ^F _ル
装備その他	185,24ca ^F _ル

換算・ca^F_ル/110、us^F_ル/130、474,027円

総計 4,195,669円



カナディアン・ロッキーの花

(行動記録)

18日 (土)	熊本駅をJRにて出発。福岡空港より大韓航空にてソウル経由ロスアンゼルスへ。 エアポート・ヒルトンホテル泊 熊本駅発(10:00)・・・博多着(11:15)・・・タクシーで福岡空港着(11:50)・・・福岡空港発(14:25)・・・釜山(15:01~16:10)・・・ソウル(16:50~20:55)・・・ホノルル(10:17LT~11:45)・・・ロスアンゼルス(19:45LT)・・・ホテル着(21:00)
19日 (日)	快晴。ロス発、ソルト・レーク・シティー経由カルガリーよりカナダ入国。レンタカーでバンフへ。食料調達後レイクルイズへ。ホテル・レイク・ルイズ泊 ロスのホテル発(04:30)・・・空港(04:40~07:30)・・・ソルト・レーク・シティー(10:00LT~11:30)・・・カルガリー(14:10LT~16:00)・・・130k・・・バンフ(18:30~20:30)・・・60k・・・レイクルイズ(21:10)
20日 (月)	快晴。ルイズ湖、モレーン湖を散策後、パーク・ウェイをコロンビア・アイス・フィールドへ移動。明日のアサバスカ登山に備えて北氷河取付点まで偵察する。モンビア・アイス・フィールド・シャレ ルイズ湖(08:00~11:00)・・・モレーン湖(11:30~12:10)・・・レイク・ルイズ発(13:00)・・・125k・・・コロンビア・アイス・フィールド着(15:00) 偵察行動(15:30~20:00)
21日 (火)	快晴。アサバスカ峰登山。待機組はスノー・コーチでアサバスカ氷河見学。下山後ジャスパーへ移動。ホテル・シャトー・ジャスパー泊 登山記録 I. フィールド駐車場発(04:30)・・・モレーン取付点(04:55~05:00)・・・氷河取付点(2660m)(06:55~朝食~07:30)・・・下部プラトー(2810m)(09:00)・・・アサバカ 北壁ルート 分岐点(09:50)・・・アイス・フォール横(10:20)・・・シルバートン 下トラバース 開始点(11:20~11:35)・・・上部プラトー鞍部(12:20~12:30)・・・シルバートン 北西尾根(最高到達点)(3360m)(13:40~14:00)下山開始・・・氷河取付点(17:40~18:00)・・・モレーン尾根取付点(19:40)・・・駐車場(20:05) モンビア・アイス・フィールド 発(20:30)・・・105k・・・ジャスパー 着(21:50)
22日 (水)	雨、午後曇り。午前中ジャスパーで買い物。午後マリーナ湖のクルージング、世界3大美景の一つスピリット・アイランド見物、エヂス湖、アネット湖見物。連泊。 走行110k
23日 (木)	快晴。エディス・キャベル、エンジェル氷河・アルパインメドウの花を楽しむ、キャベル湖ジャスパーで買い物後ロブソンランチへ移動。ロブソン・ランチのウディー・ハウスに泊る ジャスパー発(08:30)・・・28k・・・エディス・キャベル(09:40~12:20)・・・28k・・・ジャスパー(13:30~16:30)・・・110k・・・ロブソン・ランチ・インフォメーション・センター(17:40)Mて。ロブソンが美しい。
24日 (金)	快晴。キニー川レークまでのハイキング。ロブソン・ランチでバベキュー・パーティー R. ランチ(09:30)・・・トレール・ヘッド(09:30)・・・キニー・レーク・ハット(12:00~13:00)・・・トレール・ヘッド(14:40)
25日 (土)	ロブソン(06:30)・・・ジャスパー(09:29)・・・バンフ(11:20~13:45)・・・ミンネワカ 湖(14:00~14:25)・・・カルガリー空港(16:30~19:00)・・・バンクーバー空港(20:10) ホテル・ラマ・ルネッサンス泊 日本料理店で夕食。
26日 27日	快晴。バンクーバーからソウル経由帰国 (ロブソン・カルガリー 間の距離約 500k) バンクーバーホテル(10:00)・・・空港(10:30~13:30)・・・ソウル(12:13LT~16:00)・・・福岡空港(19:30)・・・博多駅(20:25)・・・熊本駅(21:40) 全員無事帰国 解散

(注) 文中の「LT」はローカル・タイムの意。

チョーオユー／シシャパンマ登山報告

馬 場 博 行

はじめに、今回の遠征では熊本支部の皆様方から温かい物心両面にわたるご支援を賜り厚くお礼申し上げます。チベット側からチョーオユー8,201mとシシャパンマ8,013mの二つの8,000m峰に登るため「カトマンズクラブ」の16名の仲間がネパールの首都カトマンズに集結したのは、1992年の7月中旬のことです。私もカトマンズクラブの一員ですが今回は特に日本山岳会熊本支部設立35周年記念事業の一環として、この遠征に参画しました。また特に登山隊の了解と支援を得て、チョーオユーの山頂からパラグライダーで滑降を試みる予定でした。この遠征は約三ヶ月半の長期に亘るものでしたが、実行段階では三つのステップに区分されます。第一のステップとして7月中旬から8月上旬まで、高度順化のためアンナプルナ山群一周のトレッキングを実施しました。トロンパス5,416mではパラグライダーの滑降訓練も行いました。第2ステップは8月中旬から9月下旬にかけて、チョーオユーの登山期間です。可成りきびしい状況ではありましたが、9月20日に無酸素で登頂することができました。

第3ステップは10月下旬に帰国するまでのシシャパンマの登山期間です。悪天候と想像を絶する強風に前進を阻まれ、7,780mを最高到達点として登頂を断念しました。以下日程を追って登山行動について報告致したいと思います。

(登 山 報 告)

7月18日、福岡発カトマンズへ。同行者は高度順化訓練をサポートする 銚 正博君と私の長男、馬場岳人の2人。諸準備を整えて7月22日、小型飛行機でポカラへ。翌日軽飛行

機にのり継いでジョムソンバへ飛ぶ。雲上に高くマチャプチャレ、アンナプルナ、ダウラギリなどヒマラヤの巨峰が並び胸を熱くする眺めだ。しかし乱気流に捲き込まれあわや大岩壁に激突か、というスリルもあった。いよいよトレッキング開始、ジャルコット、聖地ムクチナートを経てトロンパスを目指す。生憎、雨季の真ただ中で連日の雨、ヒマラヤの山々や四囲の景色も見えず、ひたすら歩くだけ。7月28日トロンパスの手前4,750m地点で氷雨に降られてテントを設営し、ここをB・Cとして3日間トロンパスを往復したりして高度順化をはかる。7月31日テントを撤収してトロンパスを越えてマナンへ。以後、毎日5～6時間を歩き8月9日カトマンズに帰着した。

8月18日、私はカトマンズのコスモトレックでカトマンズクラブ登山隊と合流し、チベットへ向けて出発した。国境の町コダリまで車で約6時間、友誼橋を渡ってチベット自治区に入る。ザンムーで1泊した後ニエラム3,750mへ向かう。ニエラムには3日間滞在し附近の5,000mの山々で高度順化トレーニングを行う。8月22日、標高5,050mのラルン峠を越えてティンリの町を目指した。見渡す限りゆるやかに起伏する茶褐色の高原が果てしなく続く。登山隊を乗せたランドクルーザーは、平均高度4,500mの不毛のチベット高原の道を砂塵を巻き上げながら疾走した。

ティンリは標高4,342mの町、稀薄な空気、肌を焼く強烈な日の光、ぬけるようなコバルトブルーの空の色、チベットの大地に立っていることを実感する。8月23日から4,960mのB・Cへの中継地点までトラックで隊荷を

運ぶ。

途中の湿原で、ヒマラヤ越えをする渡り鳥のツルの一群に出会った。中継地点に仮B・Cを設営して3日間高度順化のため附近の5,600mほどの山を往復して徐々に体を調整していった。仮B・Cから5,700mのB・Cまでは3日かかりで延105頭のヤクを使って隊荷を運んだ。8月31日北西面から本格的なチョーオユー登山を開始した。C・1を6,500m、C・2を7,000mとのぼし、7,500mにA・Cを設置して高度差701mのファイナルピークを目指した。

9月13日午前9時頃、私達がB・Cで朝食をとっていると、突然8,000m附近から2本の大きな雪崩が発生した。C・2からC・3に荷上げに向かっていった隊員とシェルパ6名のうち、隊員の1人が流された。B・Cからその状況が双眼鏡で手に取るように見えたがどうすることもできない。雪崩は幸い7,000m附近で止まった。トランシーバーから悲鳴に近い声で現場の状況を伝えてきた。流された隊員は右手の先が雪面から出ていたので、発見が早く一命をとりとめた。しかし掘出された時は全く意識がなく、わずかに呼吸音があっただけと言う。近くにいた韓国隊の酸素ボンベを借りて、その日はB・Cまで降ろすことになった。このことで我々4名の第1次アタックは延期せざるを得なくなった。我々のほかにもこのルートには、韓国隊をはじめスペイン、イタリア、スロベニアなど多くの登山隊が入っていた。連日の悪天候のせいもあったが、この事故以来各隊の動きがびたりと止まってしまった。天候はますます悪化しラジオの短波放送はインド洋にサイクロンが発生し北上しつつあると伝えていた。折角苦労してつけた北西面のトレースは、降りしきる雪に埋まってしまった。各国隊ともどこかゞ先行してトレースをつけてくれないかと、夫々相手の出方を見守るように静まりかえっ

ている。9月17日天候は回復した。7,500mに滞在していたスペイン隊は素早く登頂を目指して行動を開始した。我々も翌18日に動き出したが、C・1からC・2へ登っている時に、登頂を果たしたと思われるスペイン隊の4名が下山してくるのに出会った。そのうち2名は可成りひどい凍傷を負っており、8,000mの頂上のきびしさを物語っているようだった。9月20日、7,500mのC・3を4名のアタック隊は午前2時と5時に分れて出発した。私は午前5時頃にテントを出たが、まだ薄暗い傾斜45度の北西面の氷雪の斜面は、身も心も瞬時に凍りつくようなきびしさだった。一寸油断するとすぐ足指は凍りはじめる。凍傷を恐れて手と足の指先を必死になって動かしながら登り続ける。8,000mをこえると無酸素のため極端に動作が鈍くなった。

頭はボンヤリして思考能力は極端に低下し視界もかすんでよく見えない。延々6時間の登高が続いたが突然目の前にチョモランマの山容がとびこんできた。もうそれ以上登る高みはなかった。私はホットした。午前10時45分、私は極寒のチョーオユーの頂に強風にさらされながら立止まった。足元に広がるヒマラヤの山々の連なりは神々しいまでに美しかった。頂上に立った感激は急には湧いてこなかったが、偉大な大自然の力の前に思わずぬかずきたくなるような厳粛な気持ちであった。風が強く、ここまで自力でかつぎ上げたパラグライダーもケースから取出すことはできなかった。強風にせかれるようにわずか5分ほど立止まった頂上をあとにした。身体はすっかり消耗してヨレヨレの状態、こんな時に事故が起きるのだとボンヤリ考えながら下降を続けた。この日から翌日にかけて酸素組と無酸素組に分けて、カトマンズクラブの仲間達13名がチョーオユーの登頂に成功した。このようなヒマラヤ8,000m峰えの大量登頂は前例が少ない快挙といえるだろう。この成

果の最大の要因は、全員がヒマラヤ登山に精通した技術と体力を持っていたこと、登頂へ向けて烈しい情熱と執念を燃やしたことにあったと思う。この素晴らしい仲間達と登れたことは本当に幸せだった。無酸素による高所登山は予想以上に消耗が烈しく、身体機能にさまざまな障害が出たのでB・C撤収後一巨カトマンズまで下った。3日間、体を休めた後、次の目標のシシャパンマを目指して10月1日カトマンズを出た。10月2日、シシャパンマB・C5,000mに到着した。ここは1964年5月、中国隊がシシャパンマに初登した時ベースキャンプを設けた所だが、周囲の景観は筆舌に尽し難いほど美しい。ネパールの国境線に連なる山々は茶褐色のなだらかな丘の上に、青氷に飾られた山体を鋭く突き出して並んでいる。ふりかえると茶褐色の大高原が目路の限り広がり、その中に象眼されたような真青な塩湖が、紺碧の空の下で静まりかえっている。10月4日、既にタイムスケジュールを超過した我々は、大急ぎで5,700mの水河のモレーンの上にB・Cを建設した。そこから二つの前進キャンプを出して北東稜から主峰を速攻することになった。10月8日、私を含む3名の第1次アタック隊が出発した。水河を横断して6,300mのC・1まではアイゼンの歯も受付けられないほど固い氷の斜面が続いた。翌10月9日6,850m地点にC・2を設けた。10月10日午前0時淡い月明かりを頼りにテントを出た。しかし北東稜に上がる手前7,000m付近では真暗になり、ヘッドランプを点けて斜度45度を登る。午前7時半頃7,380mの北東稜に到達した。風は一段と強くなり必死になってツェルトを3人で被ろうとしたが却って吹き飛ばされそうになって断念した。逃げ場所もなく立往生したが、運よくロシア隊のテントを発見し、その入口の前に1m以上の大きな穴が掘ってあり飛び込んで風を避けた。このタコツボで風がやむのを

待ったが、一向に治まる気配がない。業を煮やしたのかゴソゴソとロシア隊員2名がテントから這い出して来た。彼等は強風について頂上目指して登り出した。私達はここまでほとんど飲まず食わずでしかも連日の睡眠不足で可成り消耗していた。しかし、ロシア隊の行動に刺激され30分後には後を追ってタコツボを出た。7,500m地点でロシア隊の1名に追いついた。彼はあまりの強風に前進をためらっているようだったが、気を取り直したか暫く我々と行動を共にした。しかし7,600m付近で前を行く仲間に引き返すように叫んだ。我々のうちの1名も疲労の極に達して登頂を断念し、相談の上1人が付添って下降することにした。私は1人になって頂上を目指した。風は容赦なく吹きつけ袖断しているとバランスを崩して滑落しそうになった。頭の中は頂上のことより下降のことでいっぱいだった。1本の固定ロープも張ってなく不安で仕方なかったのである。しかし登頂を断念する理由にはならない、まだ体力はある、ここで諦めればきっと後悔すると自分にいいかせながら足を運んだ。既にテルモスの中もカラ、アメが3ヶ残っているだけだ。岩峰を左にまわりこんで7,780m地点では、烈しいブリザードのため立止まって耐風姿勢をとる時間の方が多くなった。前を行くロシア隊員も苦斗に耐えられず、遂に登頂を断念した。下りもまた死の苦しみだった。その後、6,850mのC・2からのアタックは無理との判断から、ロシア隊テント7,380mのそばにC・3を追加した。しかし第2アタック隊も烈風に足止めされ、C・3にとどまるのが精いっぱい引返した。10月15日第3アタック隊も烈風でテントを破られC・3までで断念した。その後やゝ風が治まり、私は再度アタックのチャンスに恵まれた。10月17日第4アタックは6名で決行された。10月18日C・2到着、夜半からまた強風が吹き出し、19日になってもやま

ず停滞する。20日風が治まり勇躍C・3に向かった。この分なら明日は登頂できると皆信じて疑わなかった。ところがC・3に着いて啞然となった。テントはズタズタに引き裂かれ、ポールは無残に折れ曲がり、運び上げたテントでは6名を収容することは不可能だった。やむなくタコツボを掘り破れたテントで上を覆い2隊に分かれて夜を過ごすことにした。しかしまた夜半から強風が吹き荒れ出した。ここは風の通路なのかテントごと吹き飛ばされそうな感じであった。三国友好隊のチョモランマの時も強風にあったが、その比どころではなかった。午前5時テントを出たが立っていることもできない程だった。もう登頂は絶望的な状況だった。しかし私は1人で強風をついて登り出した。ふり向くと2名の隊員が後を追って来た。残る3名の隊員はC・3から引き返すよう手をふって合図をしている。私は2人を待ったが烈風のためほとんど前進は不可能だった。3人で雪面に身を伏せ、凍りついた顔を見合せ無言のうちに断念を決意した。この時の登降はC・3、7,350mから100mにも充たない距離で結局第1次の時の7,780mが最高到達点になったのである。私のシシヤバンマは終わった。3ヶ月半もの長い期間、厳しい自然環境のもとで過ごした16名の隊員達は、誰も皆すばらしい仲間だった。心から感謝したい。

思い出の冠帽連山

— 渡正山から冠帽主峰へ —

支部顧問 奥 野 正 亥

連山の主峰、冠帽峰(2,541m)から北北東に数座の支峰を連らねて延びる北尾根は、^{としやう}渡正山(2,200m)を最後に国境の大樹海に溶け入っている。1939年の冬、私達はこの尾根の縦走を目指した。当時この北尾根と虹台峰の稜線は、未踏の空白地帯であり、未知へ

の期待に胸が高鳴る思いであった。縦走パーティは、渡部泰造(京城齒専学生・19才)、伊藤玉喜(朝鮮銀行・24才)、それに私、奥野正亥(金剛山協会・28才)の3名。計画は朱乙から朱乙温川を遡って馬耳岑の東拓作業所に泊り、北尾根末端の渡正山から縦走して主峰に至り、更に南冠帽峰(2,440m)、西冠帽峰(2,432m)、虹台峰(2,471m)、北雪嶺(2,442m)の稜線を完全縦走し、延社に下るという画期的なものであった。所要日数は10日、予備2日の計12日を見込み、装備、食糧、燃料を準備した。どんなに軽量化を計っても(当時のことで……)一度では運べない。往復運搬(ツープッカ)でやらざるを得ないが、北尾根の水平距離は約15km、起伏の多いこのルートをトレースするのは、可成り辛いことになりそうだと覚悟を新らたにした。3名の小パーティであったが、最年少の渡部は、齒専山岳部長の稲川教授から「あいつは飯さえ喰わせれば、いくらでも歩く」と、折紙付きだし、女性ながら伊藤は1934年冬、金剛山の最高峰^{ひやう}毘盧峰(1,638m)の単独縦走を果たした実力派でキャリアは充分である。

12月24日、渡部が先発して羅南の冠帽の主と云われた^{たつもと}齊藤竜本氏を表敬訪問。次いで東洋拓植会社に森林軌道の便乗を依頼するなどして、私達が2日後に着いた時は入山の準備を完了させていた。12月26日、森林軌道のストープ付客車の乗り心地は快適だが、馬耳岑を越えて作業所に着いた時は暗くなっていた。12月27日、入山第1日目は荷担ぎの人夫3名と共に渡正山に向う。積雪は30cmほどだが、ヤブの中でスキーは使えない。昼過ぎ荷をデポして人夫をかえす。デポ地からコブを一つ越した鞍部にC₁を建設し、再度、荷上げのため往復する。

第2日目、C₁から半分の荷を持って出発。森林限界を越すと腰までもぐるほど雪が深くなり、クラストして大きなスカブラができて

いる。風が強いようだ、などと暢気に話し合いながら登ったが、まさかあんなに恐ろしい風に吹き悩まされるとは、考へもしなかった。渡正山の山頂は 360度遮るもののない大パノラマである。冷たい風が吹いていたが、空は晴れわたり国境地帯は見渡す限りの大樹海、その果てに白頭山や胞胎山など素晴らしい眺望が開けていた。先ず目指す冠帽主峰は、思ったより遙か彼方にくっきりと聳えているが、それまでの尾根は予想外に複雑な地形である。これは当然楽しめるぞと、内心ほくそ笑んだのだから、我ながら何とも甘いものだった。日本海側は一面厚い雲海に覆われているが、南下石山 (1,741m) のピークと雪稜の一部が浮び上って見えた。頂上から少し進んで目印になる岩蔭を選んでデポとし、C₁ に下った。

第3日、C₁ を撤収し全装備を持って出発する。渡正山を越え、前日のデポを通過して前進し、吹きさらしの屋根上にC₂ を建設した。この夜は渡正山初登頂と往復運搬の成果に、一同上気嫌で意気があがった。

第4日、風が勢いを増し、大きなスカブラに足を取られながら行程が捗らない。半日前進したところでデポしてC₂ へバックする。

第5日、夜明けに風が止んだ。テントを出ると深い霧に閉ざされて視界は50mもない。

前日のトレースは全く消えてしまい、平坦な尾根筋のルート判断が困難になった。デポ地点を通過する頃から、風が強まりガスは吹払われたものの、今度はその横なぐりの烈風に悩まされることになった。C₃ はうまい具合に岩蔭のシャクナゲの群落地に設営することができた。この夜は大晦日ということで、小瓶のブドウ酒をくみかわし逝く年を惜しんだ。

第6日、1940年元旦は晴れ、しかし厳寒。強風についてデポに戻り、隊荷を前進させる。

2,270m峰を越えた鞍部に荷を置き、C₄

に戻った。元日早々きびしい1日だったと話し合ったが、実はこれが冬の冠帽連山の歓迎の序章であったのだ。

第7日、寒風はますます激しくなり、気温もぐんと下ってテントの内側是真白に着霜した。食糧、燃料は確実に減ってゆく筈なのだが、体力も消耗するので、荷は一向に軽くない。テントも氷結して嵩張り重くなって、撤収移動がまゝならない。この日、前日のデポを通り越して中冠帽峰 (2,450m) を半ば登り、東側に雪庇状のテラスを見付け、C₄ を設営した。連日烈風に晒されて歩くと少々風には不感症になるが、北冠帽峰の西側大斜面を雪煙を捲いて吹上げる様を見ると、骨の髄まで凍りつく思いであった。

第8日、烈風、厳寒。山での移動は、必ず3名が同一行動することを原則としていたが、この日は1名をテントに残し、2名でデポ地を往復することにした。テントを出て雪稜を越すと、広大なガレ場の大斜面を轟音をあげて、雪まじりの烈風が怒濤の様に吹き上げてくる。まるで激流に身を投げ込んだ様で息もつかない。風が気体であるとは思えない凄まじい量感に圧迫された。30分程頑張ったが前進不能と見て、テントへ戻ることにした。後を向いた途端、忽ち稜線まで吹き上げられてしまった。この僅かな行動で渡部は、鼻と頬に軽い凍傷を負った。夜になっても風威は衰えず、尾根越しにザー、ザーと砂利をぶち撒くように吹きつけてくる。

テントの中は着霜で真白、その霜がテントのはためきと共に顔に降りかかってくるのは全く有難くない現象だった。この日、気温はマイナス36度まで下った。

第9日、夜明けと共に風もやゝ納まり、待望の晴天となった。大張り切りでデポを往復し荷上げをする。食糧が身近にあると実に心強い。隊荷を整理すると、明日からワンボックで直進できることが解り、一同気を良

くする。夕刻には更に風も弱まったので、埋ったテントを掘出したり、内張りについた氷塊を取り除いたりした。これでテントも大分軽くなった、と笑い合う余裕も生れた。

第10日、1月5日の明け方、一時風が強いが出発する頃になって、晴天ながら猛烈に吹き荒れ出した。テントの外に出したザックが吹き飛ばされて、急斜面を60m程もグリセードで取りに行くハプニングもあり、出発は10時過ぎになった。尾根上は目をあけられない程の地吹雪で、その合い間に主峰の頂上が見え隠れする。中冠峰の登頂は諦めて西側大斜面を慎重に横断して主峰との鞍部に向う。烈風が洪水のように雪を吹きつけてくるので息もつけない程であった。鞍部と主峰頂上との高度差は380m、最後の登りと気力を奮い立たせたが、烈風は渦を捲いて四方八方から打当ててくる。その度に我々は情ない程よろめき、膝をつき、また半回転して尻餅をついたりした。主峰下しの風は猛烈で冷酷で執拗に我々を苦しめたが、いまや頂上は頭上近くにあり、気力を振絞って一步一步と高度を稼いだ。やがて不意に足元の傾斜が緩くなったと思ったら、頂上の一角に立っていたのだった。一段と烈しい突風が轟音と共に真向から襲ってきた。我々は左側に少し進み、三角点標柱を囲んで立った。

皆、無言で平然としているように見えたが、強い感動で胸が一杯になっていたのだ。三本の手が握り合わされた時、伊藤が何か言ったが凄惨な風の音に吹き消されて、聞きとれなかった。私は、四辺が薄暗く感じられる地吹雪の中で、胸を熱くして立ち盡していた。

今は亡き藤木九三氏の短歌をお借りして、この稿を終りとしたい。

みそなはず 神こそいませ ひた吹雪く
この頂に 立ちたる われを

瓢湖の白鳥

石井久夫

ずいぶん前から一度は行ってみたいと思っていた瓢湖（新潟県）で、昨年末の12月中旬に、念願が適って「白い恋人」の白鳥に会うことができた。寒がそば降る寒い午後、水原駅に降りたち地図を片手に瓢湖を目指した。飛翔する白鳥の姿を期待しつつ、田圃道を歩いたが、40分ほどで瓢湖についた。早速、双眼鏡を取り出して湖面を眺める。点々と白い塊が見えたが、それがオオハクチョウで全部で20羽位が羽を休めていた。改めて周囲1km余の、この小灌溉池を見渡すと、その数2万羽に近いカモの大群が、湖面を真黒になる位埋めつくしてひしめきあっており、凄絶な景観である。人と鳥との安全な接近距離、鳥にとって「嫌な距離」は普通50m位といわれているが、ここでは何と1m近く殆ど手のとどく距離まで近付ける。特にカモ類は警戒心が強い鳥なのに、餌付けの所為か人を全然恐れる様子がなく驚いた。白鳥も同様で近くまで寄ってきて、人を信頼しきっているという感じである。湖畔にたつ「水原町水禽管理舎」のモダンな建物の壁に、「只今 3,500羽」の文字が見える。餌付けの係の人に聞いたら白鳥は朝この池を飛びたち、夕方に帰って来るのとことで暫く待つことにした。2時間ほどで次々と家族ごとに帰ってくる姿を見ることができた。翼をいっぱいのにばして飛翔するさまは白いグライダーのように優美だが、時折みせる羽搏きは大型の鳥だけに迫力がある。その年生れたヒナ鳥を守るように編隊を組んで、次々に夕闇迫る湖面に舞いおりてくる景観は、幽玄な水墨画の世界を見るようで素晴らしい。

いつの日か彼等の故郷であるシベリヤ北極圏の繁殖地を訪れることを想いつつ、雪の散

らつく田圃道を宿に向った。

子連れ山

田上 敏行

このところ、2歳になった長男を連れて山に登っている。この1年で県内外の山を20山程登った。勿論、標高差のある山は親も子も大変だから低い山か、高くても標高差の少ない山ということになる。そんな山歩きのうち、熊本からは「少し遠い山」について幾つか書いてみたい。

鞍馬山 570m (京都)

ここ10年ほど正月は初詣を兼ねて関西の山によく出掛けている。平成4年の正月は牛若丸と鞍馬天狗でおなじみの鞍馬山に登った。

新春ムード溢れる京都の市街地をぬけ、加茂川べりの出町柳駅から叡山電車に乗る。他所では余り見かけなくなったレトロ風の電車の中は、鞍馬詣での人で満員。乗客達の話し合っている言葉から、ほとんどが地元の人であることがわかる。初詣の方位として京都の北に位置する鞍馬寺は人気があるようだ。もともと北というのは、天にあって宇宙を主宰すると考えられている北極星の在る所。我が国でも古来から北極星に対する信仰は、北辰思想や妙見信仰の形で見る事ができる。また平安遷都の基になったと考えられる道教思想の四神相応の理念も、都の北にある山を重要視している。そんなことが鞍馬の初詣と何らかの関係があるのではないか。気がつくと車窓の両側に山が迫まり、宿場町の面影を残す鞍馬の駅に着いた。木の芽煮を売る店の多い通りを抜け、朱塗りの仁王門をくぐり、所々雪の残る参道を上って行く。玉砂利のこの参道は、清少納言が枕草子の「近うて遠きもの」の中で挙げた「鞍馬のつづれ道」なのである。山の斜面をスイッチバック式に上って行くと、最後は108段の石段を登りつめ、

ようやく本殿金堂に着いた。平安京北方の守護神として毘沙門天をまつる暗い室内は、たち込める線香の煙、ゆらめくローソクの炎、低く流れる読経の声に満たされている。その異様な雰囲気早く出ようと子供がむずかる。正面に比叡山が望まれる本堂前の広場で休憩したあと、本堂裏から奥之院へ通じる山道に入る。僧正ヶ谷を経て貴船に至る、このあたりの山域はその昔、牛若丸が修行に励んだと伝えられるところで、「息つぎの水」、「背くらべ石」など舞台装置が多い。鞍馬山の山頂は、この背くらべ石から少し登った経塚のあたりにあるが、子供の昼寝の時間になったので割愛して杉木立の中を奥之院へ下る。一般には奥之院は本堂より高い所にあるものだが、ここでは山道を可成り下った所にある。奥之院「魔玉殿」というが何となく意味ありげな名だ。案内板に「650万年前に金星から地球へ壺玉として天降った魔玉尊が奉安されている」と何やらUFOめいた説明がしてある。

その昔、金星信仰があったのか、それとも近くに隕石でも落ちたのか、いずれにしてもその由来の発想が面白い。葉が落ち盡くして明るい急な山道を下ると、兩岸に料理屋が建ち並ぶ貴船川に出た。水の神様として信仰の厚い貴船神社に詣で、暗くなりかけた道を貴船口駅へ向った。……………1月2日

三輪山 467m (奈良)

近鉄桜井駅に降り立つと、目の前にお椀を伏せたような三輪山の秀麗な姿があった。全山が神域とされている穏やかな山容は、5月の陽光を浴びて濃い緑に被われている。駅からタクシーで大神神社（おおみわ）へ向う。運転手の話ではゴールデンウィークはどことも混んでおり、特に長谷寺方面は大渋滞とのこと。

10分ほどで土産物屋や茶店が並ぶ参道入口に着く。木洩れ日のなか、団体客や家族連れが行き交う玉砂利の参道をゆるやかに上って

行く。三輪山の麓にある大神神社は、拜殿からすぐに御神体である三輪山を拜礼する形になっている。三輪山は古代から聖なる山とされ「三諸の神名備」と稱し、山そのものを御神体としてあがめた大和随一の信仰の山である。万葉きっての才媛、額田王が近江遷都の時に詠んだ「うまさけ三輪の山……」は、当時の飛鳥人達のこの山に対する思いの深さを表しているようだ。このように三輪山が古くから親しまれてきたのは、ひときわ目をひく美しい姿からではあるまいか。参拜の後、拜殿横の石段を下り木立の中の道を狭井神社へ向う。大神神社の摂社であるこじんまりしたこの神社は、三輪山の入山口になっている。社務所に入山料 200円を納め「三輪山参拜之証」と書かれた木綿たすきを肩に掛けて、しめ縄が張られた登山口から登りはじめる。杉木立の中を登る道は前夜の雨に濡れ、しっとりとして落ちて清々しい。標高のわりには急な登りで、背中の子供の重さが応える。途中に2箇所、巨石が集った場所があり、しめ縄が張りめぐらしてあった。

この巨石群は頂上から順に、奥津盤座、中津盤座、辺津盤座と呼ぶそう。恐らく古代巨石信仰の名残りだろう。2時間ほどで山頂の奥宮に着いた。幾人かの信者が生玉子をお供えして拜礼していた。この御神体は蛇（竜神）なのだろうか。奥宮から少し歩いて奥津盤座に行く。周囲はうっそうと木が茂り展望はない。その薄暗さが却って神秘感を増す。小さな子供づれだから神様も大目に見てくれるだろうと、盤座の前で弁当をひらく。山を下り再び大神神社の参道へ戻ると、脇に「そうめん処」の看板が目についた。早速なかに入り本場三輪そうめんを注文、さすがに極細の麺の味は格別で2人前も平げてしまった。

…………… 5月3日

高野山（楊柳山） 1,009m 和歌山

午前8時に熊本空港をたち、正午にはお盆

で賑う高野山奥野院前のバス停に降り立った。

早いものだ、県内の田舎に行くよりずっと楽かも知れない。大勢の参詣者に交って奥之院に向う。参道の両側には延々と墓地が続く。

「弘法大師のお膝下に眠れば極楽往生間違いなし」ということで、遠く鎌倉時代から建てられはじめたという墓石群は約20万基といわれ、その中には歴史書にも名を残す武将や著名人の墓も多い。大師廟に参詣した後、摩尼山の登山口に向う。季節外れのウグイスの鳴声を聞きながら、夏草を払いのけて登る。標高は800mほどだがさすがに夏の陽は暑く、木陰の山道に入ってホッと一息ついた。ひと登りで涼風が吹き渡る摩尼峠に着き、さっそく駅で買った名物「柿の葉鮎」の包みをひらく。ここまで来ると人の姿もなく先程までの雑踏がうそのように静かだ。

峠からの道はモミなど自然林が残っていて深山の趣さえ感じる。20分ほどで木立に囲まれた摩尼山頂（1,004m）に着く。山頂の祠にかけられた小さな鐘を妻がならすと、チンと軽やかな音色が涼風の中に広がってゆく。

山頂から尾根道を下ると、行手に高野3山の最高峰、楊柳山の尖峰が間近かく見える。時折り右手の展望が開け、大峰から吉野に至る山々が視界いっぱいに飛び込んでくる。黒川峠の鞍部から楊柳山へは「猿滑り」のような急坂、眠りこんだ子供を背負って汗びっしょりになって登る。やがて3等三角点が置かれた山頂に着いた。空海が真言密教の聖地として開いた高野山は、蓮の花になぞらえた内八葉、外八葉と呼ばれる峰々に囲まれた盆地で、蓮華の中の浄土に例えられている。

（最近では空海がこの地を選んだ理由は、ここが水銀の産地として地院経済を支える力があると考えたからではとの説もある）山頂から盆地と周囲の山々を眺め渡しながら、昔のお坊さんはなかなかうまいたとえ話を作るものだと感心する。目覚めた子供を真中に祠の

前で記念写真を撮り、登頂した満足感で足取りも軽く山を下る。傾いた西陽のさすスギ林の中、ヒグラシの声を聞きながら宿へいそいだ。……………8月14日

私の近況

和仁古 昇

東洋医学の粋である漢方医学では、その病因論として『気血水』の乱れということが言われています。『気』は目に見えないものですが、人間の心のありようから始まって、精神活動の全てを含み、更には血や水の流れまで支配するものと考えられています。

現代の中国医学では、『気』とはガス状のもので大きなエネルギーを持って人間の体の中を駆巡っており、血の流れや水（汗や涙、尿、鼻汁などその他の体液一般を含む）の流れを支配していると考えられています。大変面倒なことのようにですが、要は健康で元気に生きていく為には、如何に心のありよう気の持ちかたが大切であるかを言いたかったのです。昔から『病いは気から』、『元気がいい』、『気力充実』など、気や心を使った言葉や諺が沢山あります。病気という言葉も、気を病むと読み取れるように、気が如何に大切なものであるかよく解っていないながら、この数年私自身思いがけぬことから、その気を損ねてしまいました。もともと『WPW症候群』という、半ば先天的な心臓の病気を持っていたのですが、それが四年程前から次第に悪化して、激しい動悸、不整脈、胸部の圧迫感、みぞおちから突き上げるような圧迫感による咳の発作、疲労感などがありとうとう倒れて入院する破目になってしまいました。それまでは仕事上（漢方薬局経営）人に対しては何時も『心配事があると体を壊しますよ』とか、『年を取ってからは絶対に心配事を起してはいけませんよ』など言っておきながら、自分

がそのようなことに為るとはまったく汗顔の至りです。だが今はすっかり立ち直り元気を回復しました。完全に以前の様にはいきませんが、70%位は回復した『もう大丈夫』だと自分に言い聞かせているところです。昔から『悠々自適』とか『晴耕雨読』などという言葉がありますが、現在熊本市内（健軍町）の自宅で老妻と2人、ささやかながらそれに近い毎日を過ごしております。また市内水道町の漢方薬局の方は長男が後を継いでやってくれますので安心しています。

『晴耕雨読』は私の場合、『晴登雨解』ということになります。つまり晴れた日には山に登り、雨の日には好きなクロスワードパズルを解く、という訳です。登山は4、5日おきにお天気を見て、体調に併せた低山歩きが多くなってきました。時間に余裕がある時は、山裾の神社や寺院などを訪れ、社叢の巨木を調べたり、また祭神の戸籍を尋ねたり、悠久の世界に心を浸すことに喜びを感じているこの頃です。 妄言多謝！

平成四年の思い出

門 脇 愛 子

平成4年12月31日午後5時15分、この年最後の太陽が、有明海の海上に棚引く雲の中にかくれました。一年の最後の落日を、金峰山の山頂から眺める仕来りを作って20年近くになりますが、本当に美しい落日を見ることは少なかったようです。でも今年は、雲の中ではありませんが、久しぶりに美しい落日を眺めることができました。「終りよければ、すべてよし」の感慨をもって、この1年の締めくくりをすることができたようで幸いでした。

大晦日の山路は静寂で、夏目漱石の「草枕」ではありませんが、山路を辿りながら、さまざまに思いをめぐらすのはまことによい気分です。私にとって、この1年は当然のこ

とながら、いろいろな事がありました。その内、心に残るいくつかをふりかえって見たいと思います。11月の中頃NHKより「尊厳死について」というテーマで取材を受け、それがテレビで放映されたのです。私が尊厳死協会に入会したのは2年前のことですが、7年前に父が癌で亡くなった時、(当時、父は尊厳死という言葉は知らなかったと思いますが)身体中に管をつけたり、人工呼吸器で生かされるようなことはして欲しくない、と言っていましたので痛みを和らげる注射だけはしてもらいました。従って多少死期は早まったかも知れませんが、安らかに天国に召されて行きました。そのこともあり、友人から尊厳死協会の話を聞いた時、すぐ入会したのです。今回の取材は、近所に尊厳死協会の熊本事務局長をしている方がおいでになり、私の方の保育園児と高齢者の交流会で、お話しになったことから話が持込まれたものでした。中央病院の松角先生の、「医師の立場と尊厳死の問題」という講話からも大きな影響を受けたのですが、テレビを見た多くの方から声をかけられ、尊厳死について関心を持っていたことでは、少しはお役に立ったのでしょうか。改めて「人間らしく生き、人間らしく死ぬ」ということの意味を考えさせられました。

いま一つは、50年ぶりで沼津の小学校時代の、恩師やクラスメートと再会したことです。

卒業した者に同窓会の案内があるのは当然でしょうが、途中で転校し、しかも長年遠くに離れて住んでいた私などに、同窓会の案内があった時は驚きました。今回は同窓会ではなく、仕事の出張に合わせて訪問したのですが、恩師やクラスメートの方々が集まって下さり、50年の時空をこえて交歓することができました。かけがえのない思い出です。登山の方は支部設立35周年記念のカナダ登山には参加できず、また所属している熊本アルコ

ウ会の例会参加も9回だけでした。しかし春には宮崎の双石山、夏は南アルプスの鳳凰三山、そして秋は四国の瓶ヶ森に登り、私にとって初登山の山を五つも増やすことができました。

その他、11月には美術館友の会のヨーロッパ(ドイツ、オーストリア)美術館めぐりのツアーに参加したり、どうやら健康で、多くの人々との出会いや交わりを通じて、意義ある1年を過ごすことができたと感じています。

南阿蘇あれこれ

中 村 恵 二

かつては阿蘇と言へば阿蘇谷一帯を指し、坊中や内牧などが阿蘇観光の定番地域となっていた。これに対し南郷谷一帯は「裏阿蘇」と呼ばれ、せいぜい戸下、栃木、垂玉、地獄温泉などが県内の湯治客に知られていたに過ぎなかった。まして高森、白水地区など木材の集散地程度にしか知られていなかった。

しかし立野ダム建設の着工により、戸下温泉が消える頃から南郷谷一帯の開発計画が浮上して来た。立野大橋がかかり、難所だった七曲りに変って高森への道路が便利になった。

南郷谷の各町村は裏阿蘇の名を返上して、「南阿蘇」を称え、「ふるさと創生」施策に力を注ぎ現今の賑いを生み出してきたのである。現在、国道325号線沿いには、メルヘンチックなペンションだけでも30を越え、南外輪山の中腹には大規模年金保養基地「グリーンピア南阿蘇」や野外ステージ・アスペクタを核として、温泉センターやソバ打ち体験道場、白川水源の観光資源化など、観光の拠点が続々誕生している。とにかく今、南阿蘇は面白い。以下つれづれの南阿蘇ウォッチングをご披露しよう。

“巨大蝶が舞う”

俵山峠を車で下っていると、ぱっと目に

入ったのは巨大蝶と見紛う色とりどりのパラグライダーの群舞であった。微風に乗ってフアファと飛んでいる。すぐ降りそうで意外にも滞空時間が長い。新しいスポーツとして若い人達に受けているのも頷ける気がする。しかも着地したら車で上に運ぶのだから、山登りの辛さはない。スマートなスポーツである。

但し、急峻な山道を登り下りする山行とは価値感や次元も異なるものと思い、自分を納得させた。

“山に登った航空母艦”

奇想天外な発想のもと細川前知事が遺した巨大文化施設。これが巨大野外ステージ「アスペクタ」である。南外輪山、地蔵峠の中腹に巨体を横たえる姿は、まさに山に登った航空母艦だ。時には幾千の若者達が酔い痴れるカントリーミュージック。夏の一夜、龍の目の如くレーザー光線を放射し、満艦飾のライトを明滅させねぐらのゴイサギをおどろかせるトワイライトパフォーマンスという名の光のページェントは一見に価する。

“ナチュラリストの嘆き”

某月某日 「ヒマな者はアレ持ってゴム長履いて手伝ってくれえ」！ 自他共にナチュラリストを認知された〇〇課長が沢の奥から叫んでいる。アレとはタマネギなどを入れる赤い網袋で作った即席のタモ網のこと。またヤマメ救出作戦の開始だ。昨夏は殊に雨が少なく、沢の水がよく涸れた。すると沢の中の小さな水溜りにはヤマメがアップアップすることになる。それを山鳥が狙い犠牲者、いや犠牲魚が絶えない。それで水が残っている大きな沢や淵に移そうというボランテアである。

釣りバカの連中の呆れ顔を横目に見て、汗だくの一日一善である。「山鳥クンよ、ドングリでも喰ってくれ」である。地元の人話では、山腹が開発されて水のルートが変わったらしい。滅多に谷川が涸れることはなかったそう。人災であれば悲しい。

“オサルの山下り”

某月某日、暖い日差しに誘われてキャンプ場を見廻っていると、風もないのにクヌギ林がざわついている。「そうか、もう下ってきたのか」と傍らにいた某課長がつぶやいた。よく見ると野性のエテ公が数10頭、一団となってクヌギの木に群がっているではないか。今年は例年より山を下るのが早いそうだ。山のエサが不作だったのだろうか。木の下でノラ犬がさかんに吠え立てるが、エテ公達は知らんぷり、平気な顔をして馬耳東風である。犬猿の仲というけれどサルの方が一枚上か。十二支（えと）から洩れたネコがネズミを追うのは分かる気もするが、イヌもサルも干支に入っているのに何故？ 嫁姑の仲と同じか、などと妄想をたくましくしていると、いつの間にか居なくなっていた。どこかの大根畠でも荒しに行ったのかな、今年はダイコン、ニンジン、キャベツは大豊作であちこち立ち腐れしている。「うんとやれー」

“黄昏れの五岳”

南外輪山から見る阿蘇中央火丘「五岳」のロケーションは素晴らしい。毎日見ても飽きない。時々刻々という言葉もあるけれど一日の内にも朝、昼、夕と刻々とその表情が変化することを初めて知った。殊に夕映えの山体が虚空に浮びあがるように見える時、それが次第に色を変えてゆくさまは、幽幻と呼ぶにふさわしい。暫くは立ち去り難い雰囲気包まれる。大自然が垣間見せる荘厳な美しさに、脱帽合掌したくなった。

インドを旅して

川 端 浩 文

1992年は計らずも3回海外に旅行する機会に恵まれた。先ず3月末インドに1週間、7月から8月にかけてタイに3週間、そして年末に台湾へ4日間旅行した。この内、インド

は僅か1週間の駆足旅行であったが、もっとも強烈な印象を残した。私にとってインドのすべての様相（気候風土、歴史、人種人口言語、動植物、経済、衣食住等）は、想像を絶するものであり簡単に言葉では言い表せない深刻な体験であった。それだけにインドの不思議な魅力は、私を捕えて離さない。

今回のインド行は、私のフォスターチャイルド（里子）のシヴァナ君に会いに行く、5年越しの夢を実現させる旅であった。早春の肌寒い日本から、一夜にして32度もある暑熱のインド亜大陸へ飛んだ。ボンベイから国内便のジェット機に乗りかえカルナータカ州の州都バンガロールへ。それからバスで南部の古い歴史の都マイソールへ、更にハイヤーを乗り継いで凡そ14時間後に、目的地のシラ村に着くことができた。道中見るものすべてが珍しく、ほとんど徹夜の移動にもかかわらず飽きることがなかった。半袖のバジャマとサンダル履き、または素足の男達、色とりどりのサリーやバンジャビーをまとった女性、それに牛、犬、鶏などが混在して三々五々とたむろしたり、あてどもなく手ぶらで行交ったりしている姿は私にとってこよなく印象的だった。所々方々でテント張りや木片で作った粗末な小屋に住む人々の姿を見ると、哀れに思えてならなかった。私達が車から降りると、知らぬ間に物乞いや物売りの人の群れに取り囲まれた。沿道では露天やヤシの葉やトタン葺の出店が、バナナ、ヤシの実などの果物、飲物、駄菓子を売っていた。

インドの中央部を占めるデカン高原（高度約1,500m）の南端に我がシヴァナ君は住んでいた。現地駐在員（フォスタプラン協会）の車で数人のグループに分かれて事務所を出発した。道は更に狭くなり、乾ききった凸凹のはげしい泥道をエアコン無しのドライブ。やっと着いた集落の家々は、我々の目にはとても人が住んでいるとは思えぬ粗末なも

のであった。ここの人達はヤシの葉で葺いた土壁の間きりの家で、土間にゴザを敷いて生活していた。家具調度は殆どなく細々とした暮しぶりを見て、初め頃は便りがこないと思惑をこぼしたこともあったが、我々と同じ思考レベルで期待することは間違いだと解った。文字を知らず、教育を全く受けていない人々、この土地から一步も出ることなく細々と農業に従事してきた人々、私達の援助で井戸が掘れたり電灯がついたりして喜んだ村人達が、大勢で出迎えてくれた。行く先々でヤシの実のジュースを丸ごと勧められ、初めは珍しかったが閉口した。我々一行は異星人とでも見えるのか、一挙一動を監視されているようで、俄に有名人かタレントになったような錯覚に陥ったりした。日本の凡そ9倍の広大な国土を持つインドには、8億6千万人ものが住んでいるが、民族構成は複雑で言語の種類は840を越え、公用語の主なものにはヒンディ語と英語だが、我がシヴァナ君はカルナカタ語しか話せない。駐在員の通訳で10分余の面談ができた。特定の人への過度の援助は禁じられており、文房具や菓子、我が家の余った衣類などを手渡すと大変喜ばれたが、集まった村人達の羨望の眼差しを見ると複雑な気持ちになった。雄大な豊かな自然に恵まれているながら、今なお何千年も前とさして変らぬ生活をしている人々が、この地球上に数多く存在していることを知った。

自分の毎日の生活と対比して、あまりにも異なることや格差の大きさに愕然とさせられた。

このことを自分の今後の人生にいかなる形で反映すべきか、これからの日本を背負う若者にどんなことを教え、またどう行動して欲しいかなど、多くの課題を抱えて帰国した。

ロッキーの野の花

河 上 洋 子

カナダの山旅に誘われた時から、私は氷河の山に登ることは考えていなかった。リーダーには申しわけないが、ただただ野の花に会いたい一念であった。そのために可成りの接写ができて、しかも胸ポケットに入る小型カメラを新しく購入した。カルガリーでレンタカーに乗り込んだ時から、遙か地平まで一直線にのびる道路の両側が気になって仕方がない。左ハンドルに馴れず苦勞するドライバーさんの休憩を、只管待って車外に飛び出す。雑草の中の黄色や青紫の塊は、ルピナスと知って漸く落着く。ロッキーの宝石と呼ばれるレイクルイーズ。紺碧の湖水にそっくり逆さに映るビクトリヤ氷河の美しさにも息を呑んだが、私の足下の草むらの小さな黄色の芥子に心奪われる。湖に沿ってゆっくり歩いた径の楽しかったこと。今でも心がわくわくする程の花の径である。日本なら北アルプスまで行かないと見られないヤナギランは、これから毎日大群落でお目にかかれたが、初めて見た時は感激してつい撮り過ぎてしまった。道路際や氷河が押出した河原は、ヒメヤナギランの一面のピンク色である。その中で目立つ朱色の塊、近づいて見て名を知らぬ花である。平地では淡いピンク色、高度を増すにつれて朱色が濃くなり、最後にマウント・エディス・キャベルの草原に至った時は深紅で、様々な花野の中で一際目立つ花となった。気になりっ放しのまゝ、バンフの街の書店で「ロッキーの野生の花」なる図鑑を買って、漸くその花が「インディアンの絵筆」という事を知った。

カステラ草とも言う絵葉書に日本語で説明されていた。それはカスティレア属の花と、これは帰国後、旧知の元・熊本市立博物館長、

西岡鉄夫氏宅に押しかけて教えて貰った。西岡先生は半日を私の爲に費して、数冊の植物書や英語の辞書を揃えて、私の2冊の花のアルバムに名前を書きこんで下さった。

これは後日談である。さて筆を元にもどそう。歩くにつれ花の径は賑やかになり、白いデージーのそよぐ中に、黄色のノボロギク、山アザミ、ノコギリ草、ササユリ、オトギリ草、梅鉢草。山際にはツメクサがびっしり、紫のアツマギク、イチヤク草。水際にはピンクのチドリ草、それに似た白い花、あとで調べると「帽子をかぶったレディのお下げ髪」と、これは西岡先生の名訳で、つまりはネジバナの仲間と納得した。ウマノアシガタ、キンロバイ、カンパネラ、お馴染みの花々が皆のびのびと青い空、白い氷河に映えて楽しい。ハマナシと同じピンクの野バラも水際に。湿地帯にはウタスゲが揺れていた。エディス・キャベルの山容の大きさに眼を塞がれながら登った。気持ちいいアルパインメドウ、この旅随一の花野であった。

ピンクや白のウガザクラの見事さに、思はず踏み込んで腹這いに写真を撮る石井先生。

しかしその径の辺に一枚の看板、と言っても立ててあるのではなく径に置いてあるだけ。

文字はなくて、山靴と花の絵に大きくバツ印。踏み入るな!!と読んで慌てて石井先生に指差す。禁止標識はこの1枚だけな



のに、この国の人々は実に静かで、慌てず騒がず、脇道をつくって追いこすなど全く見られない。ロブソン山麓はトービの仲間の針葉樹の大森林。この中を森林浴しながら歩いたが、林床の下草も実に楽しかった。朱色のオダマキが僅か二輪、緑の中に咲き残っていたし、大ユキザサ、ハリブキ、ニウトコが、深紅の実を沢山つけていた。キレンゲシヨウマに似た葉を広げるピンクの小花。森が切れた河原に一面、ワタスゲのような白い穂波。よく見ると、それは初めて見るチヨウノスケ草であった。ドライブの道に大デシニシ菊が楽しげに咲いていたり、「美しい毒草」という印象的な花も見た。とも角この旅での約40種の花の名前を、西岡先生は調べて下さった。日本山岳会熊本支部設立35周年の、カナディアンロッキーの山旅に感謝である。

私の1992年

鶴田 佐知子

昨年は年始めの1月に四人目の孫が生まれ、秋も深まった10月の末に五人目の孫が生まれるという慌ただしさで、碌に山登りもできなかったようだ。それでも振り返って見ると数少ないながら、楽しい幾つかの山行に恵まれた。

3月、上熊本駅から小萩山、芳野と摘草をしながら三ノ岳に登り、枝垂桜を眺めて植木駅まで歩いた。4月、天草観海アルプスの連山を歩く。春の光が溢れる八代海の海景が美しかった。5月、前年秋の台風19号で荒れた大分県（くまもと）の求菩提山に登る。8月、久しぶりに五家荘の縦木に2泊して、白鳥山（御池）周辺の自然を楽しんだ。またこの月は孫の成長を見に上京したが、折良く29日、多摩御岳山の山楽荘で開催された日本山岳会女性懇談会全国集会に、参加することができた。集会のテーマは「女性登山史あれこれ」、エーデル

ワイスクラブを主催する「日本女性登山史」の著者、坂倉登喜子さんのお元氣な話に感銘する。西宮市の宗實慶子さんや、2年前紅葉の尾瀬でお世話になった狭山市の原田敬子さん達と、再会を喜び合ったりもした。翌日は原田さんのご案内でAコース御岳、大岳山奥多摩をゆっくり楽しく歩いた。九州にはないタマアジサイの薄紫の花が咲き乱れる尾根道は静寂そのもの、またピンポン玉のようなつぼみも面白い。奥多摩駅近くの愛宕山では、レンゲシヨウマのピンク色の群生を、初めて見て感激。9月、九重・稲星山に赤川から登り雨の中を歩いた。10月、四国の瓶ヶ森に東之川から登った。石鎚山を眺めながら歩くシコクザサの道は楽しい。引き続き九州背梁（わいたさん）の小川岳、女性ばかりの雨の涌蓋山、締括りは見立から登った紅葉の傾山。11月、5人目の孫誕生で和歌山に行く。手伝いで滞在中近くの奈良へ2度程出掛けた。北の山の辺の道をのんびりとお寺を訪ね歩いた。帯解寺から尼寺の円照寺、紅葉の正暦寺と歩き弘仁寺に一泊した。翌日は和爾下神社に参り、天理参考館を訪ねた。どこに行っても柿の実いっぱい、のどかな大和路散策でした。

天草産島・愛宕岩

長田 光義

支部報第1号に「天草の観海アルプス」、第2号に「天草の遠見山考」、第3号に「天草・梶木岳の行者碑」と私が住んでいる天草島の、あまり人に知られていない山々について紹介をしました。今回は、前号の梶木岳南方海上にある産島（うぶしま）について紹介します。25,000分の1図「宮野河内」に記載されている産島は、天草下島の河浦町にあり梶木岳の南西3km、周囲5.5kmの円錐形をした小さな無人島です。しかし島の北側緩斜面はミカン畑で、宮野河内の上平港から北端に

ある上平八幡宮まで渡船が出ており、夏季にはキャンプと海水浴を楽しむことができます。

八幡宮の舟付場から、ミカン畑のコンクリート道を25分ほど上り右折して山道に入ります。スギ林の急斜面をアブやブユにまわりつかれ苦労しながら登ると、約30分で尾根上に出て、すぐに三角点(262m)の頂上です。

雑木に囲まれた山頂からの展望はあまりよくありませんが、東方に獅子島の七郎山を遠望できました。少し先に進むと、畳2枚ほどの自然石があり、碑文が刻字されていました。

「久玉山戒誓上人・明治6年」とあり、梶木岳の役行者碑と同じ制作者でした。この岩は地元では「愛宕岩」と呼ばれ尊崇されているそうです。なお渡船料は1隻 3,000円でした。

かご 籠で登る山

広 吉 功

春を告げる福寿草の花が、五家の荘の山々に咲き、梅の花便りが里に聞かれる早春のある日、店で「日帰り山行の企画はありませんか」とお客様に尋ねられた。白川の堤の菜の花に風が優しい昼下りのことであった。

昭和50年頃をピークに、社会人山岳会が企画・主催する大型バス利用の日帰りハイキング、所謂バスハイクが流行した一時期があった。ひとつの山に2台、3台のバスを繰出すのである。そんな企画が五つも六つも重なる日曜日の早朝、市民会館前はそれに参加する人々で賑ったものである。主催者の山岳会などは、もちろん前もって募集を行っているのだが、キャンセル等の世の常を当てにする、要領のいい人達もいて、ここで「その日の山」を決めるのである。つまりA山岳会主催の久住山に申し込んでいながら、当日の朝、B山の会主催の祖母山に乗りかえる、といっ

た人々もまた多かったのである。昭和60年頃から登山人口が減少するにつれ、山岳会などからの組織離れが目立ち、集団登山形態から仲良し組の小人数での登山形態へと変遷し、同時に大型バス利用のハイキングも廃れてきた。企画はあっても応募者が少なく、企画倒れになることが多く、「バスハイク」という固有表現もまた化石になりつつある。替って台頭してきたのは、登山用品店が企画・主催する「日帰り登山ツアー」である。当初は「お客様にひとつでも多くの山を知っていただければ」という素朴な気持ちで、マイクロバス等を使い各季毎、年四回位のペースで企画されていたが、現代では乱売と陰口を叩かれる程、沢山の企画が溢れ、まさに買手有利の市場となってきている。「今週はA店の仰烏帽子山にする、それともB店の黒岳に登る?」といった相談が巷で行われる所以である。

極端に言えば「籠に乗せて連れて行け」というお殿様、お姫様達である、と言ったら語弊があるかな? 登山用品店の企画山行を否定するものではないが、できれば自分達の手作りの登山を行って欲しいものである。そのことが山と自己を繋ぐ強い絆になり得るからである。国土地理院の地図を見て、ガイドブックはあくまでも参考(ガイドブックを鵜呑みにして遭難しかかり、著者や版元に喰ってかかった輩もいる)として実施すれば、山行の意義と内容の濃さに充実感もひとしおであろう。面倒かも知れないが、本来の登山という行為の底辺であり、後続者にも詳しい情報を伝える事ができる筈である。元に戻るが、企画山行を尋ねられたお客様は、「登山用品店の籠を当てにせず、自分の頭と足で未知の世界を体験して見ませんか、このことの実践がこれからの「山」を意識する人生に、どれほどの糧となるか計り知れないものがありますよ。意識の変革は山が人間の命の小ささと

その小さな生命に宿る、お殿様、お姫様の傲慢な行爲を心象風景としてパラドックスに捕えたところから出発しているんじゃないかと思えますよ」という私の言葉の羅列に、心から納得され、同時に感激してお帰りになりましたが、このようなお客様もまた少ないのです。早春の小さな店頭で、あるお客様と拙い私との会話でした。

会 務 報 告

◇ 支部委員会

日 時 平成4年4月3日(金) 19時
場 所 熊本市千葉城 熊本厚生年金会館
内 容 支部年次総会の議案検討。支部設立35周年記念行事として、カナデアン・ロッキー登山隊の派遣、及びヒマラヤ登山隊(カトマンズクラブが主催するチベットからのチョー・オユー 8,201mとシシャパンマ 8,013mの連続登頂計画)に馬場博行会員を派遣することについて検討。
出席者 奥野 本田 田上 中村(恵)河上 (5名)

◇ 平成4年度支部総会

日 時 4月25日(土) 19時
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 平成3年度事業報告 決算報告
平成4年度事業計画 予算 規約改正 役員改選・支部長 本田誠也(新任)支部顧問 奥野正亥(新任)副支部長と常務委員については次期委員会に付託。支部設立35周年記念事業として、カナダ登山隊及びヒマラヤ登山隊を派遣する。
決算 490,469円 繰越 343,009円
予算 480,000円
出席者 奥野 宮崎(豊) 本田 田上 菊池 和仁古 大木野 中村(恵) 川端 河上 藤木 馬場(博) 広吉 藤本 池崎 後藤

(会友) 大木野 前田 (18名)

◇ 支部委員会・カナダ登山隊準備会

日 時 5月10日(日) 18時
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 平成4年度事業日程について
委員会付託事項について
副支部長 和仁古 昇(新任)
常務委員 田上敏行(任期延長)
カナダ登山隊参加者11名
CL. 工藤文昭 SL. 広吉 功
出席者 奥野 石井 本田 田上 和仁古 河上 中村(恵) 工藤 広吉 藤本 池崎 丸尾 (12名)

◇ 平成4年度日本山岳会通常総会

日 時 5月16日(土) 14時
場 所 東京都千代田区内神田 コープビル
出席者 本田支部長

◇ 支部委員会・第2回カナダ登山準備会

日 時 6月21日(日) 18時
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 ヒマラヤ登山隊激励会の開催について、及びカナダ登山隊の日程、装備等打合せ。
出席者 本田 田上 和仁古 工藤 河上 広吉 (6名)

◇ 九州4支部合同会議

日 時 7月4日(土) 15時
場 所 大分県玖珠郡九重町筋湯温泉
八丁原ビューホテル
内 容 本年度全国支部集会『英彦山の集い』を担当する福岡支部の呼びかけで、その協力態勢について話しあった。なお次年度以降は各支部持回りで実施することになり、今回は熊本が担当する。
出席者 (福岡) 吉村支部長 継松 (東九州) 梅木支部長 西 甲斐 安東

(宮崎) 魚本支部長 大谷夫妻
(熊本) 本田支部長 和仁古副支部長
(11名)

◇ 第3回カナダ登山隊準備会

日 時 7月5日(日) 18時
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 旅行日程 装備 食糧計画等の最終
チェック。
出席者 本田 石井 田上 和仁古 工藤
大木野 河上 藤木 広吉 藤本 池崎
丸尾 (12名)

◇ ヒマラヤ登山隊激励会

日 時 7月12日(日) 18時
場 所 熊本市千葉城 熊本厚生年金会館
内 容 チベットから、二つの 8,000m峰、
チョー・オユーとシシャパンマに連続登頂す
ると共に、山頂からパラグライダーで滑降を
試みるというヒマラヤン・アドベンチャー登
山隊の馬場博行会員とサポートの 銚 正博会
員の壮途を激励した。
出席者 奥野 宮崎(豊) 本田 田上 工藤
和仁古 大木野 中村(恵) 川端 河上
広永 矢毛石 神谷夫妻 藤本 出来田
中本 前田 丸尾
(一般) 立石 加藤 末藤 林田 深水
志谷 福味 米村 馬場 松隈 議武夫妻
(33名)

◇ カナディアン・ロッキー登山隊

期 間 7月18日～27日 10日間
内 容 熊本支部設立35周年記念行事として
カナディアン・ロッキーのアサバスカ 3,491
m登山及びアイスフィールド・パークウェイ
周辺とロブソン山麓のトレッキングを実施し
た。
参加者 石井 本田 和仁古 工藤 大木野
河上 藤木 広吉 藤本 丸尾 (10名)

◇ チョーオユー／シシャパンマ登山隊

期 間 7月中旬～10月下旬 3ヶ月半
内 容 熊本支部設立35周年記念行事の一環
として、カトマンズクラブが主催するチョー
オユー8,201mとシシャパンマ8,013m登山隊
に馬場博行会員とサポートに銚 正博会員の
2名を派遣した。馬場会員は9月20日無酸素
でチョーオユーの登頂に成功した。

◇ 夏季例会(ビールパーティ)

日 時 8月30日(日) 18時30分
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 神谷会員のビデオ作品「春の万年
山」上映、工藤会員の「カナダ登山」の報告
あり。
また広告会員、丸尾会友のスライドも上映
され生ビールの乾杯も回を重ね盛会であった。
出席者 奥野 西沢 宮崎(豊) 石井 本田
田上 和仁古 工藤 大木野夫妻 門脇
神谷夫妻 加藤 吉田 広吉 藤本 池崎
出来田 中本 後藤 前田 丸尾 (23名)

◇ 全国支部大会「英彦山の集い」

日 時 10月31日(土)～11月1日(日)
場 所 福岡県田川郡添田町英彦山
内 容 「アドベンチャー森の家」で開会式
地元の登山家、足利武三氏のスライド(九州
の山々)と講話あり、会場を国民宿舎「ひこ
さん」に移して盛大な懇親会。翌日は生憎の
雨ながら予定通り高住神社の登山口から北岳
中岳(1,200m)に登り奉幣殿に下山した。
参加者 西沢 石井 本田 田上 和仁古
馬場(猛)夫妻 河上 藤本 丸尾(10名)

◇ 第8回宮崎ウエストン祭

日 時 11月3日(火) 9時
場 所 宮崎県高千穂町 三秀台
参加者 奥野 西沢 本田 田上 池崎
(5名)

◇ 秋季例会（冠岳・828m）

日 時 11月14日（土）～15日（日）

場 所 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町鞍岡
高千穂屋旅館

内 容 前夜は高千穂屋旅館でヤマメと山菜料理を囲み懇親会。翌朝うす曇りの天気ながら高千穂からかけつけた佐藤会員ほか2名の地元の人を加え、冠岳八十八ヶ所巡りコースを登る。山頂部は三つの岩峰に分れているが全部に登る。

参加者 西沢 宮崎（豊） 本田 和仁古
川端 大木野夫妻 樋口夫妻 藤本 前田
丸尾 佐藤（渡辺 興裕） （15名）

◇ ヒマラヤ登山報告会

日 時 11月29日（日）17時30分

場 所 熊本市大江 NTT熊本会館

内 容 チベットからチョーオユー8,201mとシシャパンマ8,013m、二つの8,000m峰登頂を目指した馬場博行会員は、9月20日チョーオユーの無酸素登頂に成功した。続くシシャパンマは頂上直下まで迫りながら悪天候に追い返えされたという。初めての8,000m峰登頂の状況を感じ動的に報告した。

出席者

（会員）奥野 西沢 宮崎（豊） 本田 田上
大木野夫妻 池崎 藤本 神谷 出来田 鋳
馬場（博） 前田 丸尾 （15名）
（一般）立石 松隈 渋谷 志谷 福味夫妻
藤田 深水 末藤 （9名）

◇ 日本山岳会平成4年度年次晩餐会

日 時 12月5日（土）18時

場 所 東京都港区高輪
新高輪プリンスホテル

内 容 開宴に先立ち午前10時から支部長会議、次いで13時30分からナムチエバルワ登頂報告会があり、18時例年通り皇太子殿下をお迎えして開宴。620名の会員が参加して盛会

であった。

出席者 本田支部長

◇ 支部新年晩餐会

日 時 平成5年1月9日（日）18時30分

場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋

内 容 これまで最高の27名の出席を得て極めて盛会であった。本年は支部設立35周年を記念してカナダへ登山隊を送り、また馬場博行会員のチョーオユー登頂成功もあり、河上会員の絶妙な司会も手伝って大いに盛り上がった。

出席者 奥野 西沢 宮崎（豊） 石井 本田
田上 和仁古 工藤 松本 門脇 川端
河上 樋口夫妻 馬場（博） 広永 神谷夫妻
加藤 吉田 矢毛石 藤本 出来田
中本 宮崎（守） 前田 丸尾 （27名）

◇ 春季例会（仰烏帽子山 1,302m）

日 時 3月6日（土）～7日（日）

場 所 球磨郡五木村高野 民宿『山里』

内 容 相良村の椎葉谷川より仏石を経由して仰烏帽子山に登る。早春のこの時期、仰烏帽子山は福寿草見物のハイカーで賑う。しかしそれは元井谷ルートだけで他の登路は静寂そのものである。

参加者 奥野 西沢 石井 本田 田上
和仁古 河上 池崎 出来田 前田 丸尾
（11名）

会 員 消 息

◎ 新入会員

後藤之俊 （11119）
〒860 熊本市武蔵ヶ丘2-250
電話（096）337-3129

鋳 正博 （11152）
〒862 熊本市保田窪5-7-1

電話 (096)382-3015

支部顧問 西沢 健一 奥野 正亥

◎ 会 友

丸尾龍一

〒861-41 熊本市薄場町634-1

電話 (096)357-1444

◎ 転 出

中馬薫人 (6222) 福岡支部

中馬一枝 (6352) "

〒818-01 太宰府市青葉台4-17-12

電話 (092)921-7878

◎ 冒険ロマンチスト賞

ロマン溢れる行動で夢にチャレンジし、県民に大きな感動を与えたとして、エフエム中九州と熊本浪漫会議が設定した第1回冒険ロマンチスト賞の受賞者に阿南誠志さんが選ばれた。1992年8月12日のことである。受賞理由は『山びこ山村塾に教育の夢をかけ、今年1月に小学生9名を東南アジア最高峰のキナバル山登頂に導いて、子供達に夢を実現させる素晴らしさと喜びを教えた』としている。阿南さんおめでとう。

◎ 永年功勞表彰

門脇愛子さんは、熊本市で『愛光幼稚園』を開いて長年に亘り貢献されているが、平成3年に富山で開催された全国保育研究大会で厚生大臣表彰を受けられた。

編 集 後 記

支部報第4号を発刊する。会員の原稿が締切りを大幅に過ぎても集らず、やきもきさせられた。ワープロ編集でもできれば、こんなに手がかからずに済んだかも知れないが、ソロバンで字数計算をしてページ合わせをする前近代的な編集なので恐ろしく暇がかかる。今回は、支部設立35周年記念行事として2つの海外登山隊を出したので、その報告が支部報のメインとなった。カナディアン・ロッキーは工藤隊長から克明な報告が寄せられた。2つの8,000m峰に挑戦した馬場博行会員からは、臨場感が溢れるような登頂報告を書いてもらった。成るだけ多くの会員に原稿を出してもらうために一応、枚数を指定したが、きっちり守って出した人と、そうでない人もいてまとめるのに苦労した。前支部長の奥野さんには前号に引続き、今は遠い山になった冠帽連山のパイオニアワークの記録を書いていただいた。古い記録の散逸を恐れたからである。また阿蘇南郷谷の大規模保養施設「グリーンピア南阿蘇」の総務部長として、目下阿蘇住いの中村恵二会員からはエッセイが寄せられた。天草在住の長田会員からは、例によって知られざる低山の紹介があった。

(本田・記)

支 部 役 員

支部長 本田 誠也

副支部長 和仁古 昇

常務委員 田上 敏行

委 員 工藤 文昭 中村 恵二

河上 洋子 広吉 功

会計監事 樋口 格